8

徘諧万一集

全

へ 5
2970

2770

俳諧百一集序

越中康工選

歌の百人一首のうち遠き昔の連歌仙のうつりかはるまでを
のこりなくとり出し世遠の物心ぬのくいつ〳〵と募り今
はまた言ひ感乃のうつりの人々と画き絵夕
師と仰ぎ友と竟ぶ冥加なくも迷ひを迫り
俳友に加へ揚木のもとゆゑ高きさまを永三八
頃の寿武のうつりを文の宗鑑寛永の貞徳貞室夢安
の立圃寿頼季吟寛文の宗因かく世々の先達有と

以て髓一を出し〳〵慶の桃青初て正風を窺さ
眼前乃その中の不易乃さ〳〵みとゝ〳〵流行を中
の有て数百乃髓を別〳〵を詠境と踏て天下幾ント
芭蕉風の級杜子西行ともてゝ〳〵古今乃名師
の門人の去来有て実情をつ〳〵其角夫草嵐雪
涼菟北枝各よく翁乃風神をうきふ許六の文あり
支考の風雅乃血脈を汲〳〵隋句を頃乃一人の〳〵方錦
の所ふこゝ中須乙由出て滑稽自立乃古有て

杉さやうの風流を書やう今をゝ海内さんかうとゝ
なるをちうをうけをゝ通ゝ物作ゝの皆造化乃神
をもとくてゝ多し〳〵且奇眼力乃ゝをゝ世ゝ
鳴ル作者も秀逸を足なて〳〵乃をゝ多ゝ多ゝ
一句乃をく是をゝるを〳〵て載之則百一集と成すゝ
や注をゝを〳〵けゝくをゝむと古人を以百ゝ〳〵其句く
乃意乃ゝるゝをゝ筆舌の用ひゝく説をゝ〳〵をく
初学乃人乃をゝめの先と法書乃語をけ弼り

きゝつたへのまゝを述るのみ

寶曆十四年甲申夏五月

八椿舍自序

松乃意味

芭蕉

蛙飛

古池や

此の句の意味や有り難く吟しまみくを流し
唱くさまし〳〵自然と行く水の中に下まても
飛び込む心地さ〳〵佛へし

元氣や
神代
乃
事も
思ふ
皇武

此神職や古代すなりく
此源を招き星

思古乃山
宗鑑
物母
ふる
元氣
乃

今乃世をきくさ
世乃胡をふる〳〵

望一

常小耳を目ふしつゝ
万物を考事心泰山乃
ごとし

月や

名聚乃手經

新法師 貞德

見きくと
そうの
花乃
乃山

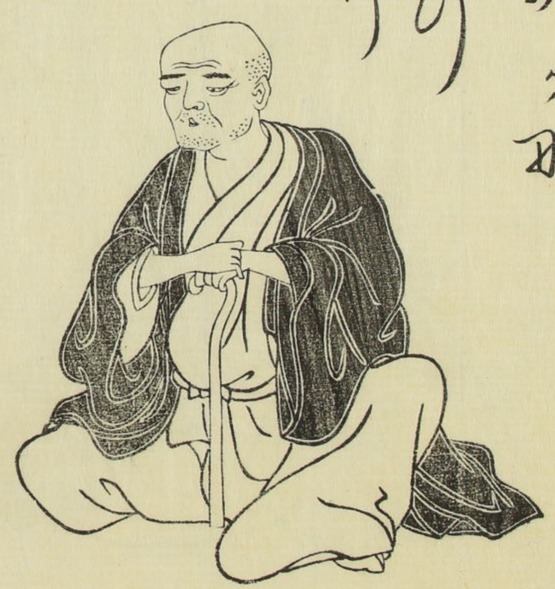
負室

妙境にのぞみ
芳野之人乃目を楽しむ
此一句小此山乃数景を尽つま

一吹
師走乃
月乃
衣城

立圃

冬月乃吹小しくかしこく
云之しを苔世乃
調うをし



百姓の形　童頼

きるうの物

順禅乃

柱

柱乃こと

枝乃ごとく

枝乃ごとく

花見の歌　季吟

ちるとく

うくく

一儻と

意赤

味ふかしとかうしふるまふをもしろし

常春の花

師走

山

冨士乃

一句乃詠梅ヲ四季乃景色ヲ

おもゝ塔能ゝ

湖春

白雪や

芳ゝ

別

句

宗因

為ニ一ノ手乃拍子ニ成ル

稲妻や

きのふは

東

けふは

西

其角

秋乃稲乃かりゝ世乃さはゝ
安さを小 翌や又いゝ
就 けふは東 ふ心乃なまゝ者人と
恨さる詞を殘し
絶作ゝ

夕ゝ

見龍

鳴田

声小

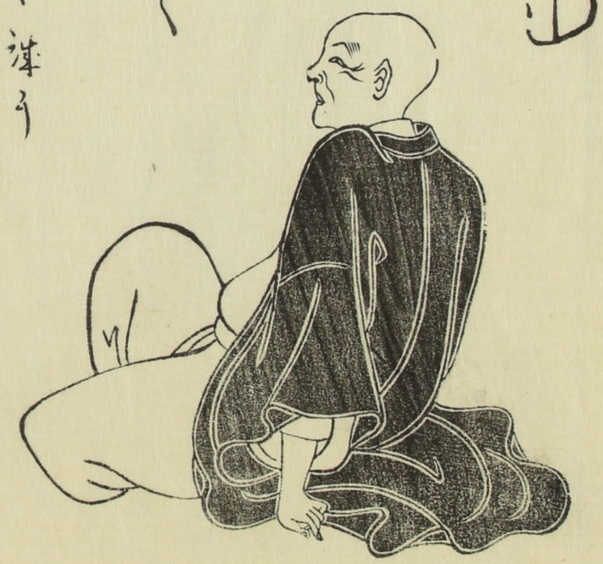
牛呵る

自然と眼乃前乃ものゝ
妙を是 老三童乃さまを而者
人ゝゝ勝を断しなり

嵐雪

来山

蘭園



象り乃深ふして諸乃変る
平安乃景色乃
庭乃面乃
ゆき乃

應くと
ゆくや

去来

隨聞記曰
支那支考曲翠正秀其角許六おのく称嘆
乃まゝる多小略ゝ去来者曰情多き者中ゝ之自賛小
曰此句小自然と寂乃尽ぬると雖一ゝ乃侍り影乃
翁乃句ハ強き弱き程乃重句乃ものゝ
陽ゝる乃哉ゝ乃ものゝ此寂乃

取つの如
ちゝて
うゝ

蛙
の形
太艸

爰ハおのゝとゝろ
此人乃悟道とゝろ
とゝろ〳〵〳〵嗚呼

風乃
一日
吹て
居り
丑
乃
涼菫

香乃ゝゝハ
ゝるゝゝゝ乃
形骨ゝゝゝ乃
ゝゝゝと切とゝつゝゝ
絶唱乃白乃やゝハ
ゝゝゝゝ吹ゝる
まゝくや只自然乃ゝゝん

許六

面後乃朝日うらこうふさしてく澤る
雲小 仰雲乃さらくとうけるかなさ
何とかく遠小しく直小まつ乃筆色なるか

夕陽乃
何映
乃は
く
北枝

百尺乃竿頭つゆ
ほる 妙手限

初しぐれ　野坡

待やうや　坂乃

此ふる乃

[illegible]

よくも昂

流りとまるかな

同丹波

青葉

山郭公

[illegible]

主水　堂

錦金乃吹り　[illegible]

秋乃月

尚白

木ゝ

細らうふしゝ物をおこゝろ
ゝね寒牡をなまんとゝ

秋

是

竹乃

杉風

淺き砂川

信德

雜談集ニ曰今年就中腸先斷
と白氏乃年と悲しきる意
かなしむ老乃まさめしき
よるしきちりけさきる頃

鬼貫

何れく本ものと真ホ
事乃事 うわ面七ものホ言外乃妙乃
ものハ時節乃事乃事ホ

風乃
果を
看て
海乃音

言水

世をすてて
風乃言水と称す
則碑乃銘ハ殘す

業なつ
素を
ちり
つ
もみち
ら

木因

やまと人ハ
ものゝ
あはれを
しる

雨降る

春乃雪

一笑

降る雨乃降るを待つ又降る雨乃降るを他急ぐ

大くの乃

月をも

めて

七十二

任口

ちぶくとハ月をも
めて〳〵ちをとの乃 昔男乃金声小
仍て七十二ち刈此上人乃幸なる
討花を求ち〳〵ちを乃而なり

辰ゐ

つく

呪乃

きみ弘

千那

篇突小日ふかうる石小
多拓を所ゝ結るこそきみ乃
恨ゐ迄こそて翁も一箕一句と感ふ

花木

郁

木節

百花乃中ゑ玄ゝ自然乃
寂を唱ゝ感ふ

月花の
海乃
名
分別と
露川

ゆゑも知られぬ海原と
彼都良香の
三千世界眼の前に盡と
詠るさびし

枝竹や
高き
二三本
一万子

安くと入る意味不明
海棠の香りの金橘小酸りさ

秋之坊

為子爲ゞ
此俤常ゝ用口ゝ仰り

尼智月

上ゝ
言語道斷乃事ゝ

麻かりの
踏とゝ
宵戸
の
月見の
浪化

秋の
ふる
こゝろ
かな
正秀

殺生の法をゆみとちうるき
秋思のちりまて一入ふしく

うらやましく

切時

猫乃恋

越人

浪化君乃閑書小四
定家々乃
うらやましく　芭蕉
のゝ猫乃ことゝふること

坂本乃邸

秋乃月

尼芳樹

焼く

笠乃さや

俳門小さ才乃うゝ乃恋
皆白まさゝ二章きさの雨とほく
俊性法師

麦喰しく
厂とおもへ
とこの色
野水

隨聞記曰
なくてもの人を意ふ怪ろし
是ふ仍て

う天吠出
蓑乃
を書も
雨秋
弘

曽良

墮舎曰こゝを聞いと宗匠出しこゝ墮乃をを書とろふ
蓑乃居乃秋乃ふり
雨ぬらしこゝろいう乃文字を使こゝ
かゝくこゝろをもちこゝ

牛乃角
墨書
入
分
梅の実や　句空

梅乃けさうさ花をはしめて
下ゑ〻〻十月をおもふ

秋乃雨
人の
高積　凡兆
下京や

浪化君乃閑書ゑ四上ゑを
墨ゑ〻〻るを　翁乃ふ
る詩ゑ〻〻を拾ひ〻〻

その

鼻紙の

是式部の型書墨董多くて
手色と乃ふ〻〻就の是をおるかさん

友吉

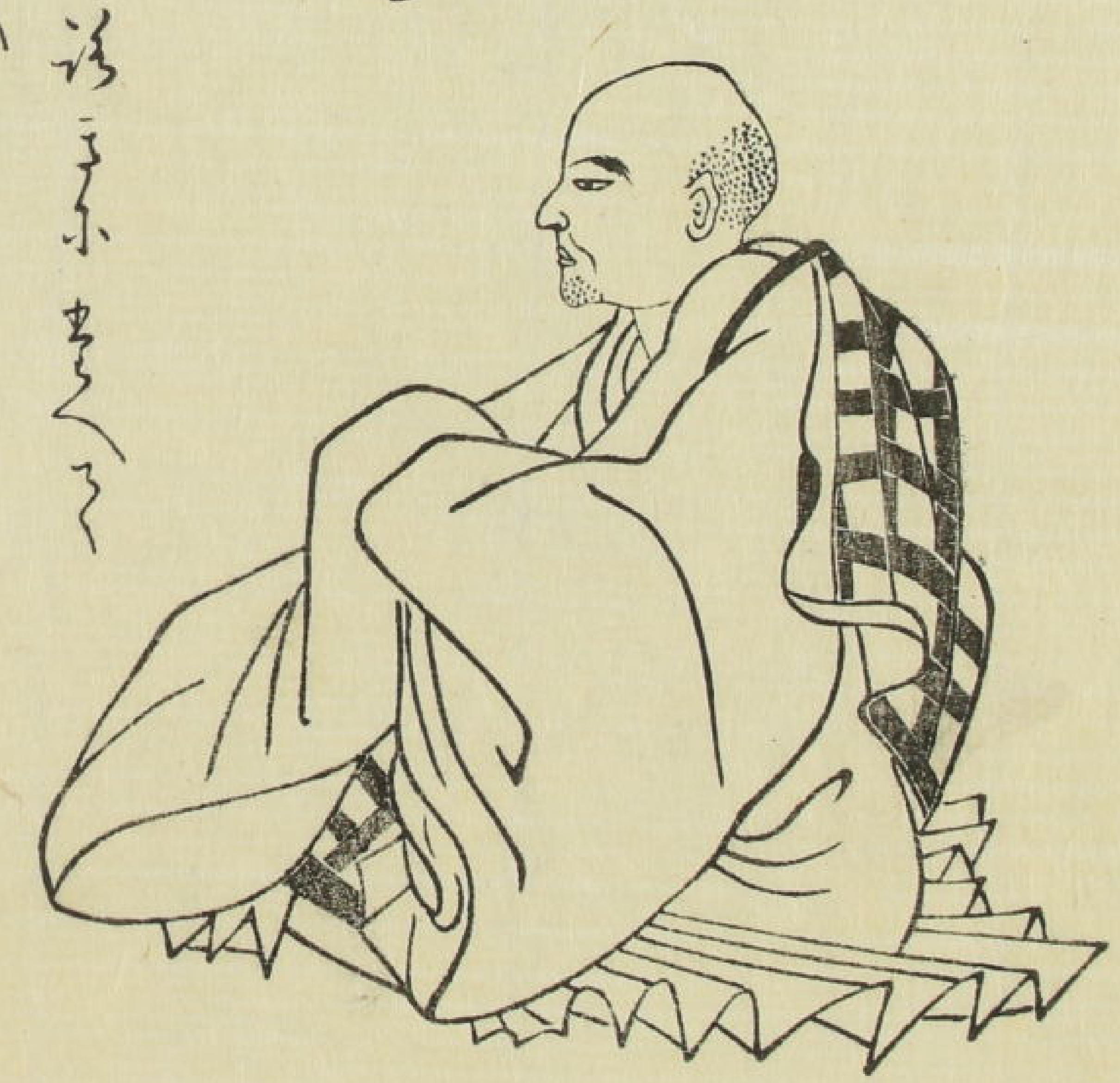
月も四角

天秤乃

月も四角まるけもと云〻〻
〻〻光も〻〻みくと〻〻〻〻〻〻
一作よく田舎とろろ人とやいう

けしり船　李由
時雨乃
脚も
日枝まても

其風景おもしく詠まへて
心ちなくなく
彩かる
此俳なるらん



水乃音　木導
行中
麦乃
春風や

宇陀法師に曰　師説に京曲第一乃句之
後代手本なるへしとて褒美て
風ぞいまむ花乃糸口とて脇して送らる
きひしとそ

菜

はく

二水

花は咲く時を花と咲く時を咲くるを
時を知りて咲きまさるる
心なるかな

男

一枝

蘭

山

とよ

世をなげかしみ一枝蘭ふる
歌屋乃迷詠ふまりく女乃情
をさまるらん

秋乃松和及

通り過

大名乃

重軌

世上小

花菊

女房すて
教ゑ
身を
栗乃稚やや

不易乃功をつまんと心ざす

孝子
傳
教乃
とめ

是流行實乃
此婦人乃心を
志津摩乃

枯て
ハと
思ふて
和
梅乃実

虚有り實有り 寅奇く

從吾

夕暮も
曙も
鶏張
義
巴静

秋乃夕乃暮もまつ乃曙乃
なるものもかしと鶏張乃ふつてう
なる姿とそのまゝふ述て書りそこ
なく乃清く物を思ふ

辨三

石地蔵

地蔵も消ゑ
もらうやと拵る
雪仏ふる乃
さむしみゝ又さむし

鬼士

初霜や

腸氷と云る雪仏乃
寒さも好情と云るべし

物おもふ
人も
うしなふ
火鉢ふち
左靜

そのもとゝ小名画乃
細色を
うつしたり

二日
月夜の
ふくを
廉乃声
五竹

出小艾へうをふ
ふくを感情石斜

涼しさ乃
ものゝ
哀や
神路
山

なゝト乃哀とおもつけるゝ
ものゝ佛乃はなをとゝ
ふ

尼
素心

曉や
灰乃
中ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

淡々

世子の物ゝ中小
世實境ゝゝん
とハ

山路を来て何やらゆかしすみれ草

石ばしり

吟

雑子

常ゝ聚ゝ日山路乃つゝき
声をたゝちたゝち
いとゝく閑寂ふかし

司鱸

怪くとも

比叡乃

たゝたゝ

袷ゝ形

舍尓

毋と始主子乃衣情を
所〻ゝ目睫連乃
昔もたゝ

桃乃花

ちるとき

鶏乃声小

鶏舎乃かちとき を作

いさらひ ふらて

ちるし 物ほし

春波

ハ

ちる

橘乃

ちるみ

素風

橘乃涼しさを

雨しる

芭蕉乃風ろく

手爲ら
ふさ
とと
人も
砂とり

杜芙

毒乃毒
所も
細さ
青柳や

秋瓜

曲節自在

千代尼

尼珈涼

白雨乃形容新ら可也

星

蓋

麻父

切切として不堪聞
都て〳〵きく涙乃星
ちるもうの俳をうゝ
ハ乃字乃働り言外乃
面白きこと

何をうゝ
声乃
鈍や
秋の
雑子

岸虎

自然と物凄〳〵心面〳〵

萩乃花
咲とゝ
日ゝ
乱ゝ
禹洗

萩乃句ヲかゝて
芭二乃孫作とゝ

一番乃秋の
面清ゝ
やゝ
生可
沢

きゝけ有ゝ
日さまし

畑中の芳野

柿の郷　左菊

麦林師乃評ヲ
一カ山乃花ハ多ク乃ハ感心不少
細工まつまとそなり迄乃白と実意
実意といふ〜〜

一ツ寄乃灯と中乃くまら

集酔

一點ノ漁燈香霧ノ中
ちまらて似うるし風景
まるしうしうく
まるるる味ひ生

灯火を
ともせば
月もまた
夜乃
蓼太

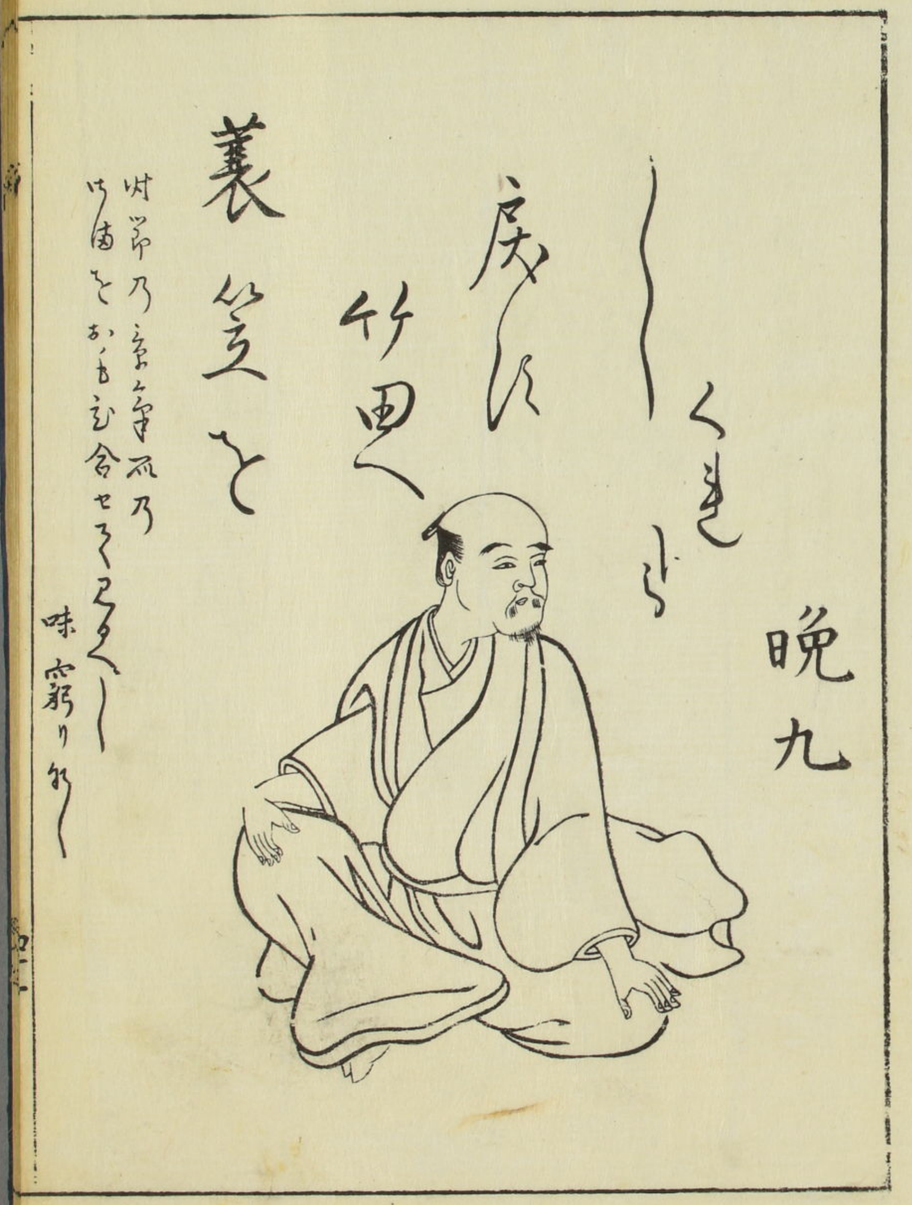
霧まがふ
心を清し
秋の夜

人も
月
霧
清夜や

見風

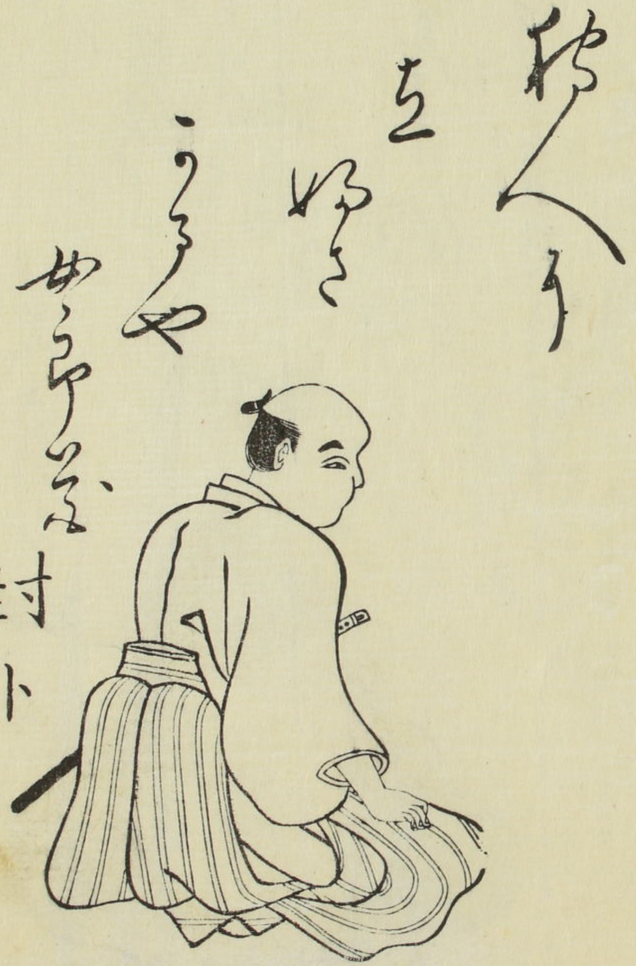
秋の中ゝ
月
霧
よく
清

涼代衣


晩九

百

百



也有

夕部 [illegible]

封ト

初語かとの言葉をうけしてを
大象 髮 [illegible]

其汀

文琴

初

夕ぐれ

柿九

葉

大阜

杜原へ
落葉
とゝや
ちりかゝ

門瑟

哥仙ふゝ遍昭と
号さるる さくらんの

日高中乃
花
野へ
蛇乃麦

麥水

花乃うハ金ハ世乃人小ゝ
越向と改しも泥中乃蓮乃ゝ

梅の実ひとつをうをけく
澗水東に流て復向西
かとりの芳人

五色しよくあるり
昆明池之

高乃初羽芳人
積てもの
何と
面白や

中了
煙乃
山陰や

梅乃注

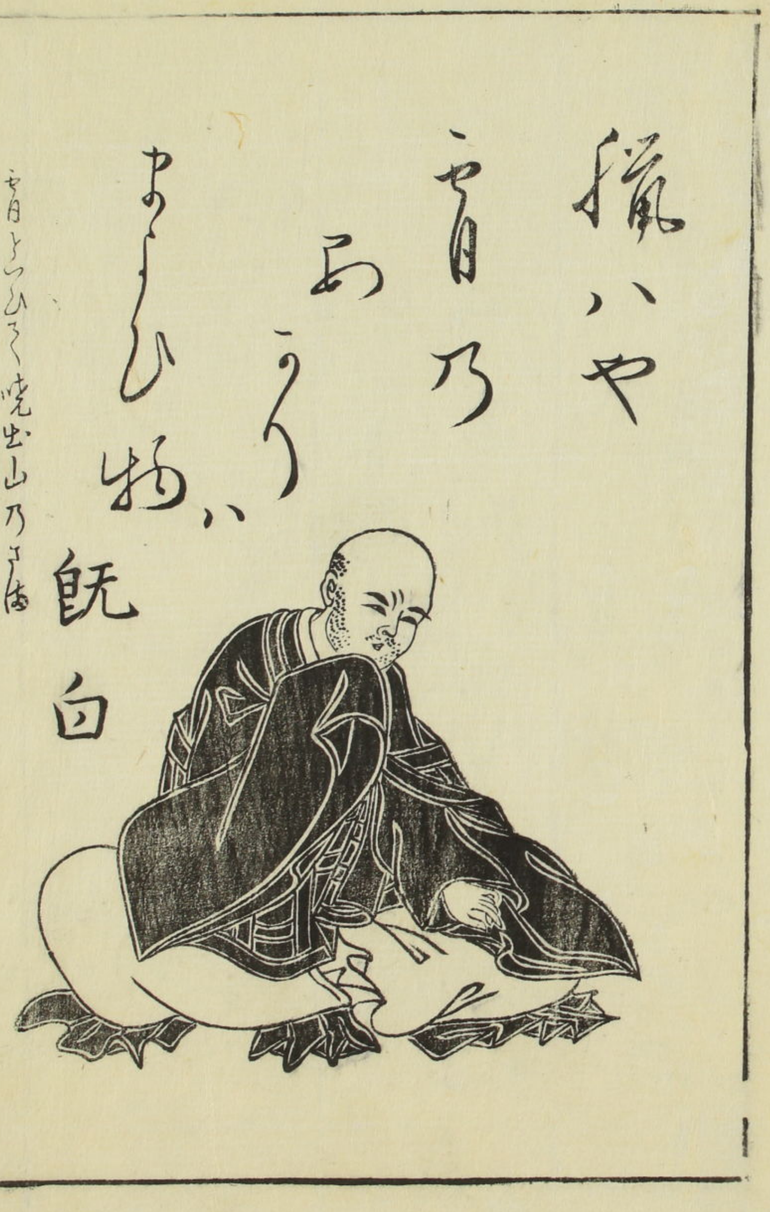
蘭更

こうばけてくそのたてゝ佛うきうと
喜景こうと眼中小乃星

山吹や可枝
さくら
蝶乃
唱仕事

中古乃風貴と浮きうま

盡う形
桜乃
戻る
春らハ仏小
進退花小犯心しるくおもむ
るむ者るかるさ侘あり詩
やさしくゆひるやう
汪由


桜ハや
青乃
ふ
うハ
ゆゆしい物
既白
青よりひくく咲出山乃さ侘
陸小ひさくくその宗旨乃
才物おくゑ分性愛し

初鶯

二ツ

四ツ

馬明

梨乃花

咲てく

是

嗚

雖乃

康工

多くの毛乃ゝ毛ゝと世上乃評を
待んきめ爰ハ毫を投しぬ

少

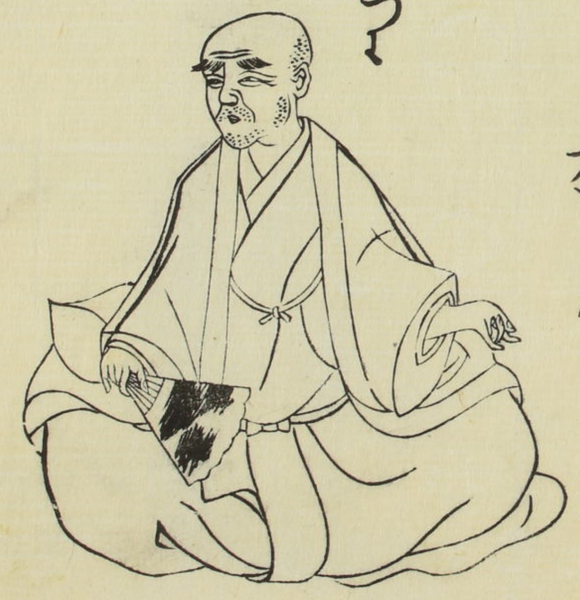
東

竹

七

柳

人ゝも又ゝきゝ客来て
心と共ハ涼しく奥ヤ　屋情左傳長也



押居

初春の
お
はつ
も
盧元

大事ハ
ひろ
ひろ
ものの
ものと
ハ
ハ
一字の
新しい
みと
そらの
やう

業
和
乃
立
枝
も
春
如
翁

希
因

死
しまる物と
活
しその姿眼前ハ
ひろ
ひろ
とう
活
ひろ
屈
景
自
然
と
有
て
志
も
立
枝
春
乃
字
ひろ
ま
も
傳
歩
優
ハ
学
ひろ
ひ
ものひろ
ひ
ひろ
ける
ま

乱くり　麥林

さとしらひう

彩色

うんこ写

その心乃さとしみすまし
おこりくゆ人も
多もさとしし
天性不思議
神境とくり

諧林百一集跋

尚絅堂蔵書

余嘗善諧之言洽而不厭簡而
文亦立之之次蓋原出乎古國風
之變之末也尚矣繼作有人而
桃青者興焉蚊足大振日錬月
鎔愈出愈奇噴々而湧也夫
性靈之発於天機者於素

篇之生歟呼嘻嘻應變現无
窮以陶冶性情發泄渣滓豈
之无裨於世道乎哉今斯
篇也无名生一一生百而吹
萬不同亦可知乎康工氏因
心而謂深乃豪籥之功而躍
于冶之中者余未知誰之至

矣者但知其簡而文洁而不厭
之為可善焉而已是為序
語水什散人出

明和二乙酉季四月

京寺町通二條下町

橘屋治兵衛梓

俳諧百一集

八椿選